



人の暮らしと文化の伝承について

園長 野中 泉

先週末は、育む会主催の「第 14 回 アトム寄席」でした。梅田や大阪市内での寄席に足を運ぶことも大変な地域のお年寄りたちや実際生で経験したことがない若い世代にも、日本の文化である「寄席」を届けたいと始まったアトム寄席ですが、今年は第 14 回、14 年目を数えます。おかげ様で、楽しみにしてくださっている方も増え、ポスターを貼ると「待ってました」と前売りチケットを買いに来て下さるリピーターの方も多くなりました。これは 14 年間アトム寄席に出演し続けてくださる笑福亭銀瓶さん・由瓶さん（笑福亭鶴瓶師匠のお弟子さんです）の話芸の魅力ももちろんですが、「寄席（文化）」を地域に届け続けてきた活動の重ねも大きいとしみじみ感じます。というわけで、今月号は、子育てを少し離れて「文化」をキーワードにお話ししたいと思います。

先月のことです。県外の友人たちが訪ねてきたのですが、アトムを視察した後、大阪で観光したいところは？と聞くと、「この辺りの『だんじり』というお祭りが有名らしいけど、全然知らないから『岸和田だんじり会館』に行ってみたい」という答え。そういえば一昨年、大阪観光大学での研究集会に来阪されていた韓国の方々にも「岸和田だんじり会館」は好評だったと聞いたことも思い出し、さっそく行ってみました。実は、私もこれが初めての来訪です。結果は、共通券で天守閣に登れた岸和田城も含めて、なかなかに迫力ある楽しい経験だったのですが、何より友人たちが、感動してくれたのは、会館で出会った子どもたちの姿でした。その日は平日で、観光客は、まばらでしたが、代わりに地元の小学生、幼児を連れた地元の家族連れが何組かいました。なぜ、地元だとわかるのかというと、5 分間ずつ体験できるというだんじりに乗っての鳴り物体験や屋根での大工方の体験での、彼らの腕前に、ただただ驚いたからです。楽しそうに「次は俺、太鼓な」とごっこ遊びの役割を替わるように次々凄腕を披露してくれる小学生たち、まさにリズムが体に染みついているという感じです。体験用の屋根の上で持参した（！）団扇を手に、華麗に飛ぶ小さな男の子。「この子たちにとって、お祭りは、大きいお兄ちゃんたちへの憧れでもあり、大好きな遊びの延長でもあるんやね」「祭りがある地域で文化が継承されるってこういうことか」と感動しきりの友人たちに、ソーリヤ、ソーリヤとだんじりごっこに興じているアトムの子どもたちの姿を思い出し、私までなぜかちょっと誇らしい気持ちになりました。

もうひとつ、また違うお話しですが、もうかなり昔、題名は忘れてしまったのですが、NHK でイタリアのオペラを特集するドキュメンタリー番組を観ました。イタリアはオペラ発祥の地ですから、それこそ国民みんながオペラを愛しているのですが、その番組の中で、陽気で歌好きな肉屋のおじさんとおばさんが、いつも通りに仕事を終え、白いエプロンを外しながら「今日は、夕飯を食べたらオペラを観に行くよ」と話す姿に、「ああ、その地で文化が育っているというのはこういうことか」と妙に感心したことが印象に残っています。彼らにとって、オペラは特別な階級の人たちの高尚な娯楽ではなく、生活の中にある、日常と結びついた「文化」なのだと、とても納得したのです。それから、10 年以上の月日が経ち、2020 年 3 月。コロナによる世界的パンデミックの最中、他の国々と同じようにイタリアでも全土で厳しい封鎖・行動制限があったことは記憶に新しいことですが、その中で、こんなニュースが映像と共に流れてきたことを、覚えている人はいませんか。「イタリア全土、各地の住民が次々に窓辺に立ち、歌を歌い、楽器を弾き、音楽でお互いの士気を上げようとしています」。というニュースと共に、イタリアらしい花と白い柵が印象的なアパートメントの窓辺に老若男女の町の人たちが立ち、口々に声を合わせ歌を歌い、お互いを励まし合うその映像に、遠く離れた日本にいる私までもが励まされ、胸がいっぱいになったことを、今でも覚えています。

日本でも、東北や熊本での震災後、いくつの町で復興の渦中に、地区ごとの「お祭り」を先に復活させたという話を聞きました。何もなくなった故郷だけど、もう一度この地でみんなでがんばろうと祭りに励まされたという被災地の人たちの話は、本当に興味深いものです。さあ、暑くなってきました。もうすぐ、また、アトムの園庭からもソーリヤ、ソーリヤの掛け声が聞こえてきますね。